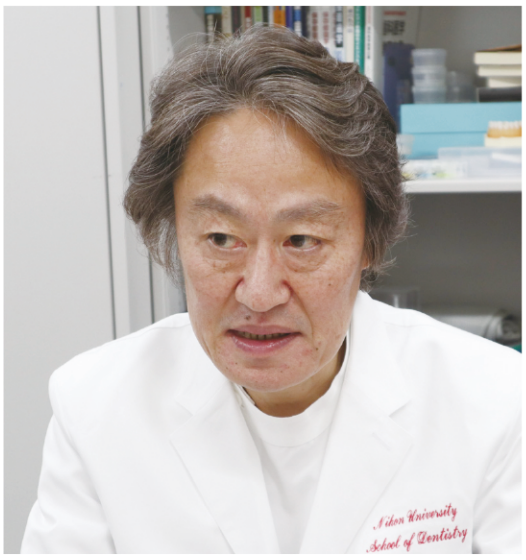
地域医療に深く関わっていくことが重要

日本大学歯学部歯科保存学第Ⅰ講座（保存修復学）教授
一般社団法人日本接着歯学会　理事長

宮崎真至氏に聞く

九月二十五日に開催された中央社会保険医療協議会総会で、ハイブリッドコートⅡ（サンメディカル株式会社）の保険収載が了承され、本年十二月一日から保険請求できるようになります。本製品を用いて、生活歯歯冠形成を行った歯の象牙細管の封鎖を目的としてレジンコーティング処理を行った場合に算定できます。そこで今回の保険収載の要望に携わった日本大学歯学部教授で日本接着歯学会理事長を務める宮崎真至氏に、歯科医師を志したきっかけ、保存修復学を専攻した経緯、日本接着歯学会と「プロジェクト一〇〇〇」とは、保険収載された象牙質レジンコーティング法について、日本大学歯学部の「学部教育」、歯科大学病院のリニューアル、今後の歯学教育とこれからの学生に期待することと今後の展望について―などを伺った。聞き手は、協会の坪田有史会長。



母と姉の姿を見て歯科医師に　恩師の教えで卒業後留学へ

―坪田有史会長　歯科医師を志したきっかけをお聞かせください。

◆宮崎真至氏　母が秋田県で歯科医師をしていました。また、私は三人兄弟で、上に姉が二人おり、その姉のひとりが歯学部に入学しました。そんな母と姉を見て、私も歯科医師を目指すようになりました。

在学当初から、在学中に留学したいと思っていました。私の場合は医局の教授から「大学院を卒業してから留学してみてはどうか」とアドバイスを受け、卒業後の米国留学を決意しました。そして四年間の大学院生活が終わってから、二年間、留学しました。

留学中の二年間は臨床に就くことはなく、日々、研究に打ち込みました。自ずと研究から論文に移行していき、だんだんと英語論文を書くことが面白くなってきて、日本に帰国してからも臨床を行いながら論文を書いていました。

その当時、私の英語論文が学術雑誌などに掲載されるたびに、達成感を感じたのを覚えています。そうした臨床と研究を継続していくうちに、結果的に大学に残ることになりました。

大学に残ることで、残念ながら秋田で開業していた母の後を継ぐことができず、実家の歯科診療所は閉院となりました。母は秋田県で学校歯科医師として長くやっていたので、充実した歯科医師人生を歩むことはできました。しかし、私が後を継がなかったことは、残念に思うところはあったかもしれません。でも、母はこの選択をわかってくれていると思っています。

「人」と「人」の繋がりが　自然と自分が学ぶ道を導いた

―保存修復学を専攻した理由をお聞かせください。

◆宮崎氏　当時、学生時代の部活で進む医局が決まっていく傾向がありました。三十年前は部活の顧問が「〇△×講座」だからと決まっていて、私の場合はヨット部に所属しており、顧問は保存修復学の小野瀬英雄教授であったため、自然と保存修復学を学ぶようになりました。他にも部活ごとに特色があり、「アメリカンフットボール部＝クラウン・ブリッジ」、「ラグビー部＝生化学」などがありました。

地域社会とスクラムを組み　地域社会への貢献を

―先生は日本接着歯学会の理事長ですが、日本接着歯学会についてお聞かせください。

◆宮崎氏　「接着」は、さまざまな歯科治療や、さまざまな審美診療を可能とします。そのため接着歯学の重要性は、臨床の場においてますます注目を浴びています。本学会では、「接着」を広めるため、要請内容に応じて歯科大学をはじめとした関連団体等に基礎研究から臨床まで説明等を行っています。シンポジウムの開催を通じて、「接着」に関する啓蒙活動も行っています。

現在、本学会は日本歯科医学会の専門分科会として活動し、歯科接着に関わる技術を医療保険制度に収載するために医療技術提案書を提出しています。今後もしかし、今はそういった部活の流れも薄れ、学生は特定の人間関係に縛られることなく、「自分が何を学びたいか」で学ぶ道を選んでいるように感じます。

さらに、接着歯学の活動を広げていこうと考えており、その一環として、会員数を増やし、専門医制度を立ち上げるための取り組み「プロジェクト一〇〇〇」を立案し実行しています。

―プロジェクト一〇〇〇とは何でしょうか。

◆宮崎氏　「プロジェクト一〇〇〇（せん）」とは、会員数を千（せん）名にすることを目指す、専（せん）門性を持たせた学会にしようというプロジェクトです。

現在、本学会は会員数が約九百人で、まだ専門医制度を設けていません。会員数を増やし、「接着歯学専門医」として、国民にしっかりと「歯科接着」についてご理解していただきながら、そしてわれわれ歯科医師も国民に分かりやすい歯科医療を提供していくことに寄与したいと考えています。

―今回、保険収載された象牙質レジンコーティング法についてお聞かせください。

◆宮崎氏　本年、本学会では提案した「象牙質レジンコーティング法」が期中に保険収載されることとなりました。生PZに伴うレジンコーティング法で、保険点数については現行の準用点数三十点から増点されていくことに期待しています。今後も新たな保険収載に向け、引き続き、「接着」に関する要望と提案を粘り強く行っていきたいです。

―日本大学歯学部での「学部教育」の方針をお聞かせください。

◆宮崎氏　本校は本年で一三〇周年を迎えます。そして歯学部は、大正五年に創設され、百三年目にあたります。

医科と歯科で比較すると、医科は明治期の富国強兵政策もあり、全国各地に医学部が創設されました。一方、歯科は歯学部の創設が遅れたため、長い歴史をもつのは私立歯科大しかありません。東京歯科大学、日本歯科大学、日本大学歯学部、大阪歯科大学などの私立大学が百年の歴史を持ちますが、国立大学は遅れること五十年後に歯学部が新設されていきました。

これらの歴史を顧みても、日本の歯科医学をリードしたのは私立大学で、その一翼を担ってきたのが日本大学です。

本校の特色は、一口腔単位にとどまらずに、「全身の中に口腔がある。口腔があるから全身がある」との体系に基づいた教育を行い、教育改革として、「カリキュラム」の改革を行いました。カリキュラムは、およそ十年に一回見直し、時代に即した歯学教育を目指してきました。また、現在百周年記念事業として新校舎建設を行っており、昨年、一期工事終了して、病院および校舎の使用が始まりました。そして現在、二期工事が始まり、二年後の竣工を目指し、今後、学生棟をつくる予定となっています。新校舎ができることによって、私たち大学関係者の意識も高まり、次の百年目を目指すためにも、強い意志を持って進んでいこうと思うことができると考えます。そして学生にとっても、学ぶ環境が新しくなることによって、「愛校心」へと繋がればと考えます。自分が所属する学校・団体などの所属感意識、新しい校舎で先輩・後輩の「絆」など、さまざまな繋がりが生まれることを期待しています。

―歯学部付属病院のお話をお聞かせください。

◆宮崎氏　付属歯科病院の病院長を四年八カ月勤め、新病院の建設に携わりました。新病院の建設にあたり、病院の内装、ユニットの配置など、丁寧に時間をかけましたが、特にユニットについては、動線を考えたうえでの配置となっており、これまでにない仕組みを取り入れました。また、医療器具の貸し借り、滅菌消毒など、複雑な工程の単純化を検証し、取り入れました。さらに医科ではホスピタル・インフォメーション・システム（以下、「HIS」）を導入している病院が多いですが、歯科病院ではHISがどう機能するのか検討する必要がありました。HISの良いところを取り入れながら、患者さんと歯科医師がより触れ合えるための病院システムを構築し、二〇一八年十月一日に開院することができました。患者さんには新しい環境で安心して歯科治療を受けてもらい、われわれも高度な歯科医療を提供できるように心がけています。

―今後の歯学教育とこれからの学生に期待することと今後の展望をお聞かせください。

◆宮崎氏　新しくなった病院と校舎。そういった新しい環境の中で学ぶ学生に期待しています。そして母校を誇れる歯科医師になってほしいと願っています。歯科医師としての知識、技術を研鑽するとはもちろん、さらに母校愛をもって、自分の後輩を育てていく気持ち、そして地域の診療の中で、日本大学歯学部出身のコミュニティーを中心に、他の大学、他業種と地域社会でスクラムを組み、地域医療に貢献してもらいたい。

今後、歯科医師の展望は、非常に難しい局面が来るかもしれません。人類が経験をしたことがない人口減少と、人口ピラミッドの構造変化などを考えると、患者減少は起こり得ることだと考えます。そうすると、診療報酬の点数が低くなることもあるかもしれません。

しかし、悲観的なことばかりを考えるのではなく、患者減を逆手にとって、一人ひとりに手厚い治療ができるのだと考えてもらいたいと思います。予防医療を拡充することによって、口腔内を健康に保ち、地域医療に開業医が深く関わっていく。これからの歯科界をポジティブに切り開いていってほしいと願います。

―本日は、ありがとうございました。（了）

【プロフィール】宮崎真至（みやざき まさし）

日本大学歯学部歯科保存学第Ⅰ講座（保存修復学）教授、一般社団法人日本接着歯学会理事長。1960年 秋田県に生まれる。1987年 日本大学歯学部卒業、1991年 日本大学大学院歯学研究科歯科臨床系修了 博士（歯学）、1991年 日本大学助手（歯学部保存学教室修復学講座）、2003年 日本大学講師（歯学部保存学教室修復学講座）、2005年 日本大学教授（歯学部保存学教室修復学講座）。

所属学会・団体は、日本接着歯学会、日本歯科保存学会、日本歯科理工学会、日本歯科審美学会、日本歯科教育学会、日本口腔衛生学会、International Association for Dental Research、日本大学歯学会 など多数。

受賞歴は、2002年3月 2002 Outstanding Article Award (Int Chin J Dent)、2004年6月 日本歯科理工学会学術講演会発表優秀賞、2005年11月 佐藤賞など。

著書に『オールセラミック修復 成功するためのストラテジー 基礎と臨床応用』（医歯薬出版社）、『コンポジットレジン修復のサイエンス&テクニック』（クインテッセンス出版）、『落ちない接着 その理論と臨床的ストラテジー』（永末書店）などがある。